

第2回川上ダムサブWG（2004.9.3開催）結果報告		2004.9.13 庶務発信
開催日時：	2004年9月3日（金）10：00～12：35	
場 所：	京都リサーチパーク西地区4号館2階 第1会議室	
参加者数：	委員15名、河川管理者（指定席）20名 一般傍聴者（マスコミ含む）16名	
<p>1. 決定事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ・9/23（木）に予定されていた第3回川上ダムサブWGは開催内容を変更し、10:00～12:00に拡大学習会（対象は委員全員、河川管理者も参加可、一般傍聴者なし）、13:00～16:00に第5回ダムWGを開催する。 <p>2. 審議の概要</p> <p>「ダムワーキングと河川管理者との調整会議（8/30）」の概要報告</p> <p>榎屋リーダーより、8/30に開催されたダムWGと河川管理者との調整会議の概要報告が行われた後、今本委員より資料1-1「ダムWGの審議事項について」に関して説明が行われた。その後、河川管理者より資料1-2「ダムごとの調査検討項目」について説明が行われた。</p> <p>主な論点に関する意見交換（降雨パターン、ダムの効果、代替案等）</p> <p>榎屋リーダーより、資料2「川上ダム関係検討メモ（淀川部会の議論から）」を用いて、主な論点に関して説明が行われた後、意見交換が行われた。また、河川管理者より資料3-1「木津川上流域の降雨について」、資料3-2「河道掘削の効果について」について説明が行われ、意見交換が行われた。</p> <p>降雨パターンについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実績降雨を対象とするのか、引き延ばし降雨（仮想の降雨）を対象にするのか。短時間で集中的に降った雨を引き延ばせば、当然、流出量は多くなる。安全度を考えれば、引き延ばし降雨を対象にした方がよいが、過大な降雨予測であるとの批判もある。流域委員会としては、実績降雨を対象に審議を進めていきたいと考えている。 ・これまでの河川整備計画は、確率洪水（引き延ばしとカバー率）を対象降雨としてきたが、計画流量が非常に大きくなってしまい、いつまでも整備が完了しないという問題点があった。そこで、流域委員会は「どのような降雨に対しても壊滅的な被害を解消する」と提言し、この点については河川管理者とも考え方が一致している。ただし、ダム建設の是非を検討していく上で、一応の基準とする降雨を設ける必要がある。これが現在議論になっている対象降水である。河川管理者の対象降水に対する考え方はこれまでも繰り返し説明を受けてきた。今後は、河川管理者と議論をするのではなく、流域委員会としての対象降水の考え方を河川管理者に意見していく他ないと思っている。 <p>代替案について（主に河道掘削について）</p> <p>河川管理者より説明が行われた資料3-2「河道掘削の効果について」に関して意見交換が行われた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料1-2では、川上ダムの代替案として、河道掘削や越流堤の諸元変更の検討が挙げられているが、これらはダムの代替案ではなく、治水事業の本筋だ。ダム建設の是非とは関係なく、きっちりと検討を進めていくべきだ。 ・木津川の河道掘削として、58.6km地点で約3mの掘削が検討されているが、この程度であれば、環境や景観に大きな影響は与えないのではないかと。やはり、河道掘削は有効だ。ダム建設の是非とは関係なく、遊水地と河道掘削を組み合わせた検討をお願いしたい。 ・河道掘削によって、木津川がどのように変化するのはわからないが、景観については、周辺の 		

住民とも議論をしていくべき。また、掘削の際には水陸移行帯も考慮しなければならない。

- ・資料 3-2 で説明されている河道の掘削断面については、低水路をより緩やかにした方がよい。低水路を緩やかにすれば、川が緩やかに蛇行し、「川が川をつくる」を実現できるだろう。

ダムの効果について

- ・破堤を前提としていては、これ以上、議論は進まない。河川管理者は、越水しても破堤しない堤防を前提とした検討はできないのか。

堤防補強は非常に重要な課題であり、真剣に取り組んでいく。現在のところ、浸透と洗掘については、工学的な工法があるため、これまでも何度か検討結果を示している。しかし、越水による破堤については、ドレーンの周囲をカゴマットで覆うといった工夫はしているが、越水破堤を防ぐための体系的な検討はできていない。コンクリートで堤防を固めてしまえば、越水破堤を防ぐことはできるが、コストや環境への影響を考えた工法を考えていかななくてはならないと考えている（河川管理者）。

- ・破堤しない堤防を前提として、越水による浸水被害を流域対応でどこまで防ぐか。流域対応で無理なら、水位低下を目的としたダムを建設するのか。こういった事項は、今後、流域委員会が河川管理者に意見していくべきことであり、河川管理者に質問をしてもしょうがないことだろう。
- ・あらゆる洪水に対応するためには、堤防補強が何よりも重要だ。流域委員会は、「こういった堤防を作るべき」「こういう強化をすべき」といった指針についても意見していくべきだ。

その他

- ・史跡や遺跡は環境の一部と考えて、ダムWGで議論をした方がよい。関係者の中には、非常に敏感に反応する人も多いため、ダムWGの議論でも留意しておくべきだろう。

環境の重要さは当然認識しているが、ダムWGでは特化した議論を進めた方がよい。

- ・利水について、ダムWGでは「新規の水需要はない」という前提で審議を進めるとの説明があったが、非常に危険ではないか。将来的にどうなるかはわからない。100年の視野で考えておくべきだ。

今後のスケジュールについて

今後のダムWGの進め方について意見交換が行われ、「1.決定事項」のとおり決定した。

- 3 一般傍聴者からの意見聴取：一般傍聴者2名より発言があった。主な意見は以下の通り（例示）
傍）委員にのみ川上ダムの安全性（地質問題）に関する資料を配布した。昭和55年頃以降の水資源機構による調査資料等を検査した結果、川上ダムサイト付近に新しい活断層が確認できた。河川管理者は平成5年には認知していた事実ではないのか。河川管理者には、トレンチ調査を含めた綿密な調査を含めた、活断層に関する第2次調査を厳密に早急に実施して頂きたい。

川上ダムについてはこれまでに長期間の調査を実施し、その結果も公表している。事実や情報を隠しているということはない。河川管理者としては、これまでも説明を繰り返してきたとおり、ダムサイトに活断層はないと考えている（河川管理者）。

- 傍）委員から「検討中のダムは100年の視野で考えるべき」との意見があったが、ダム計画が進行中であるかどうかとは関係なく、ダムの必要性について審議をしてほしい。また、今後の利水計画は水需要コントロールを中心に考えていくべきというのが委員会の提言だ。これを考慮すべき。

このお知らせは委員の皆様には主な決定事項などの会議の結果を迅速にお知らせするため、庶務から発信させていただくものです。